

論文要旨

学位論文題目：日本語の道聞き談話における道順説明の特徴—母語場面と接触場面を比較して—

氏名：スケンデル＝リザトビッチ・マーヤ

本研究では、道を教える側が母語話者でかつ道を聞く側が母語話者（以下 JNS）である母語場面、及び道を教える側が母語話者でかつ道を聞く側が中級日本語学習者（以下 NNS）である接触場面のデータを基に、日本語の母語場面と接触場面のそれぞれの場面の道順説明の特徴を分析し、両場面の比較から共通点と相違点を明らかにすることを目的とした。

本論文は3つの研究から構成される。研究1では道を教える側の発話、研究2ではそれに対する道を聞く側の応答、研究3では道聞き談話の特徴である道を教える側による道順説明の反復に着目した。

研究1では、道を教える側の発話を、発話全体の特徴、道順説明の発話の特徴、道順説明の構成要素の特徴という3つの観点から分析した。分析の結果、発話全体に関して、道順説明の段階において道順説明以外の発話も観察されたこと、発話全体の回数、及び道順説明の発話回数に違いが見られなかったが、道順説明以外の発話の位置確認が接触場面において有意に高いことが明らかになった。つまり、接触場面では会話相手がNNSであるため、道を教える側は位置確認の発話を増やし、調整を行っていると考えられる。次に、道順説明の発話に関して、両場面で指示が最も多かったが、記述も高い割合で出現するという結果になった。このことから、記述が重要であり、道順説明の有効性を高めるために使われると考えられる。最後に、道順説明の構成要素について、両場面で使用回数が最も高い構成要素は環境特徴であり、その重要性が再確認できた (Allen 1997, 2000; Denis, 1997)。しかし、使用回数から見ると、道順説明の有効性を高める環境特徴と修飾要素は母語場面において有意に多く、道を教える側は会話相手がJNSかNNSかによって構成要素の回数を調整することが示された。それは、接触場面において道を教える側は道順説明の有効性より、NNSの認知負荷を軽減することを重視しているからであると推測できる。

研究2では、道を聞く側の応答を、あいづち的発話と実質的発話に分け、それぞれの詳細を見た。共通点としては、特にあいづち的発話が多いことが挙げられた。道を聞く側は、「ハ系」あいづち詞によって道順説明の展開を促し、また「ア系」あいづち詞と繰り返しによって道順説明の理解を示すことがうかがわれた。一方、自分の道順説明の理解を確認したり、新しい情報や詳しい情報を要求したりする際には、道順説明の反復と質問の実質的発話を使うことが分かった。このことから、道を聞く側の応答が道順説明の展開に影響を及ぼすことが再確認できた。しかし、繰り返しと道順説明の反復について、JNSの使用回数が有意に高く、中級のNNSにとって母語話者のように使用するの難しい言語行動であると考えられる。

研究3では、道を教える側による道順説明の反復に着目し、反復の割合及び反復の形式の割合、先行

発話別の反復の割合を調べた。その結果、まず両場面において道を教える側による反復の割合には違いが見られず、道順説明全体の3分の1を占めることが分かった。このことから、Baker et al. (2008)の結果と同様に、記憶負荷の高い道聞き談話において道を教える側による反復が多く現れており、反復が重要な役割を担っていることが分かる。両場面では、同じ部分の反復であることをより分かりやすく示すために、完全一致反復と部分的反復が使われる傾向が見られた。会話相手がJNSの場合、道を教える側は道を聞く側と一緒に道順説明の反復をするという共話的な発話、および部分的反復が多かった。一方、会話相手がNNSの場合、分からない単語に関するNNSの質問や聞き返しが観察され、それに対して反応をする際、道を教える側はNNSの理解を促すために言い換えを使用したりすることが示された。先行発話別の反復の割合に関して、母語場面の場合、道を教える側が道を聞く側の反復を確認要求として捉え、反復することが多く見られた。それに対し、接触場面の場合、まず母語場面に比べて道を聞く側の情報要求・確認要求に続く反復が多かった。このことから、Pica et al. (1987)で言及されているように、NNSにとって、情報要求と確認要求によって引き起こされた反復は重要な助けであると言える。また、道を教える側は談話の結束性や説明の有効性を高めるため、道を聞く側のあいづち的発話と、道を教える側自身の発話の後に積極的に反復を多く使うことが分かった。

以上のことから、日本語の道聞き談話の道順説明の段階において、道を教える側は、道を聞く側がJNSかNNSかによって発話を調整していること、JNSの道を聞く側とNNSの道を聞く側の応答に違いがあることが明らかになった。

本研究の会話データは母語場面だけでなく、学習者が体験する接触場面を扱っているため、母語場面の分析からは示すことのできない、学習者にとって重要な特徴を示すことができたと思われる。また、道を教える側の発話だけでなく、道を聞く側の応答の分析によって、日本語の道聞き談話における道順説明の特徴をより包括的に捉えることができ、日本語教科書の会話と聴解タスクの開発の一助となると思われる。